

「初代ラスコリーニキにおける 反キリスト論」(1)

安 村 仁 志

.... Дети! последнее время. И как вы слышали, что придет антихрист, и теперь появилось много антихристов, то мы и познаем из того, что последнее время.

I-е послание Иоанна, 2:18

子供たちよ。今は終りの時である。あなたがたがかねて**反キリスト**が来ると聞いていたように、今や多くの**反キリスト**が現われてきた。それによって今が終りの時であることを知る。

ヨハネの第一の手紙 2:18

.... Да не обольстит вас никто никак: ибо день тот не придет, доколе не придет прежде отступление и не откроется человек греха, сын погибли....

II-ое послание к Фессалоникийцам 2:3

だれでも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜならまず**背教**が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。

テサロニケ人への第2の手紙 2:3

.... Здесь мудрость. Кто имеет ум, тот сочти число зверя; ибо это число человеческое. Число его шестьсот шестьдесят шесть.

Откровение 13:18

ここに知恵がある、思慮ある者は、その獣の数字を数えなさい。その数字は人間をさしているからである。その数字は**666**である。

ヨハネの黙示録 13:18

以上は、キリスト教終末論と密接な関係にある反キリスト論にとって鍵となる聖書の言葉である。事実、キリスト教史を眺めるときこれらの言葉をもとにさまざまな国、さまざまな時代に世の終り或いは反キリストの到来が叫ばれてきた。新約聖書中に《反キリスト》なる語が用いられているのは、冒頭に引用した『ヨハネの第一の手紙』2章18節の他、同じヨハネの書簡（第一2:22, 4:3 第二:7）のみであり、反キリストの出現は“終りの時”の前兆であって、それはイエスがキリストであること

を否定し、人々を惑わす者であると述べている。福音書（マタイ24：10—12ほか）、パウロ書簡（第2テサロニケ2：3，11～12ほか）、ペテロ書簡（第2ペテロ2：14ほか）などにも同様の概念が登場する。先に引用した黙示録のことばについて言えば、海から上ってきた第1の獣、地から上ってきた第2の獣がそれぞれ神の名をけがすとともに、人を惑わしては自らの支配下におこうとする。その意味において獣は反キリストであり、それが666という数字をもって暗示されているのである。つまり、黙示文学の一つの特徴としての象徴的表現である。666という数字は獣の数であり、さらに人間を指しているのであるから、古来それがいかなる特定の人物を表わすかでさまざまな説が出されてきたのである。そしてその背景には共通して信仰に対する激しい迫害があった。666という黙示録の数字解釈については、数々の説があるが2，3だけ例を挙げると、周知の通り、ヘブル語、ギリシャ語においては文字が数字をも表わしていたため、3世紀の Irenaeus はギリシャ文字を並べてその合計が666になる組み合わせを幾例か考え出した。一つは《EUANTHAS》（但し、意味は不明）で、他は《LATEINOS》（《LATIN》と同義でローマ帝国を表わすと考えた）、《TEITAN》⁽¹⁾（ギリシャ神話中の最大の神の敵を示す《TITANS》又は、TITUS 家三人の皇帝ヴェスパシアヌス、ティトゥス、ドミティヌスを示すとして《TITANS》と読みとった）であった。そして最も有名な説はネロ説であり、それによると NERO CAESAR のヘブル語綴りを一部修正⁽³⁾ すると666という数を得るというものである。この他ローマ教皇ベネディクトス9世からルター、ナポレオン、ヒトラー⁽⁴⁾ にいたるまでの

(1) “ラテン”と同じ意味を表わす語ギリシャ語としてあてはめられたものである。

L=30, A=1, T=300, E=5, I=10, N=50, O=70, S=200となり、これらをならべて合計すると666となるというものである。

(2) 同様にギリシャ語で、

T=300, E=5, I=10, T=300, A=1, N=50をならべて合計すると666となるというものである。

(3) 一部修正したヘブル語綴りとは、NeRON KeSaR で、母音を表記しないヘブル語でありながら●を入れるのである。その上でN=50, R=200, O=6, N=50, K=100, S=60, R=200をあてはめてみると合計で666の数を得る。尚、二番目のNを除くと616となるが、黙示録13章18節の666という数字は異本では616となっており、皇帝ネロ＝反キリスト説は有力となったのである。

(4) 第2次世界大戦中、次のような仮定のもとに“ヒトラー”を666の数をもつとして反キリスト視する説が現われた。つまり英語のアルファベットをAから順に100, Bは101, Cは102としていくとH(107)+I(108)+T(119)+L(111)+E(104)+R(117)=666となるというものであった。これなどは反キリスト的な要素をもつ人物をなんとか666の数にあてはめようとする無理な計算法の典型であるが、こうした試みはしばしばなされたのである。

諸説がある。

一方、第2テサロニケ2：3では終末論を背景として、反キリスト的概念とともに“背教”がクローズアップされてくる。そこでこの背景が時の教会或いは国家の権力者におけるキリスト教への背信行為と結びつけられて、さまざまな事件やその背後にいる者にあてはめられてきた。こうした意味においては、古代ではネロ帝、マルクス・アウレリウス帝らがあてはめられ、イスラム勃興時や十字軍遠征時などには反キリストの予言が登場した。中世に入っては、12世紀末に Joachim Floris が反キリストのローマ（バビロン⁽⁵⁾と同一視されていた）出現を主張、その後継者たちにいたっては Frederick II を反キリストであると断定した。その後も反キリストは教会の頭にいるとの説、教皇の王権に対する優位性を主張しフランス王 Philippe IV との間に熾烈な権力闘争をした Bonifacius VIII（在1294—1303）1説、富を積んだ Johannes XXII（在1316—34）説⁽⁶⁾が続いた。13世紀に入ると Thomas Aquinas によって反キリスト論が体系化された。パリ大学でも反キリスト関係の文書が多数出された。しかし中世ヨーロッパ全域に見られた異端運動カタリ派では、信徒神学者 Arnaldus de Villa Nova が異端審問宗教裁判と衝突した。スコラ学派ではあらゆる終末論解釈に対する反対が当時のオックスフォード大学総長 Henry of Harclay などにより出されていたが、それでも自然現象の激変、戦争、ペスト、飢饉などがみられるときには、しばしば反キリストを特定の人物にあてはめたり、反キリスト到来の日について語られたりした。14～15世紀にも説教の中で反キリストの到来についての警告が語られることが多かった。それは1516年の第5回ラテラノ会議で反キリスト到来の切迫

- (5) ここでいうバビロンは黙示録14：8，16：19，17：5，18：10，21及び第1ペテロ5：13等にみられるもので、神に敵対する勢力としてローマが想定されていたらしい。第1ペテロ5：13における“バビロン”についてはどこを指すか諸説があるが、ローマを指すとみることが妥当であるとされている。なお黙示録17：5ではローマを念頭に入れた上で、“淫婦どもと、地の憎むべきものらの母”と表現されていることは、ローマを敵視する際によく引用された。
- (6) 聖フランシスコ会が穏健派と厳格派に分裂して、一部の厳格派は13世紀末に分離した結果、“清貧の隠修士”或いは“フラティチェリ”（小さな兄弟）なる会派が生まれた。この会派はペトルス・ヨハネ・オリビの『黙示録抜抄説教集』に依拠して、会則の緩和をはかったヨハネス22世を福音の敵として反キリスト視したのである。ヨハネス22世は1318年1月23日に教書を発布し、その第42項で次のように反論している。「…また反キリストの到来について、まもなく到来するであろうと主張し、悲しむべき説をまき散らしている。われわれは、これらすべてが部分的に異端、部分的に不健全、部分的に作りごとであると認め、起訴または反論するよりも、むしろその著者ととともに排斥すべきであると考える」（『カトリック教会文書資料集』エンデルレ書店より）

性を説教の中に盛り込むことが禁止されたことによっても明らかである。民衆レベルでは、絵画、彫刻、詩などを通して反キリストへの関心が表現された。宗教改革の時代では、イギリスの John Wycliffe⁽⁷⁾ 及びその子弟 John Purvey が反キリスト論をしばしば利用したほか、ボヘミアでもかのフスの先駆者 Mathias von Janow⁽⁸⁾ が反キリストは教会の頭に君臨していると宣べ伝えた。Jan Hus も同様の主張を行なった⁽⁹⁾。改革者 M. Luther は教皇個人を反キリストとはせず、教皇制そのものを反キリストとみなした⁽¹⁰⁾。改革以後は全般に反キリスト論はやや後退したが、ドイ

-
- (7) 1414～18年に開かれたコンスタンツ公会議の第8回総会はウィクリフの命題を有罪としたが、1418年2月22日付の教皇によって承認を受けた教令には、ウィクリフの誤謬が列挙されている。それによって逆にウィクリフの主張を知ることができるので、反キリストに関するもののみあげておく。ウィクリフによれば「教皇または他の高位聖職者による破門は反キリストの譴責であるから、これを恐れなくてもよい」(“Dialogus sive Speculum ecclesiae militantis”1379)、「神は悪魔に従わねばならない」(教皇としてふさわしくない教皇は悪魔であり、反キリストであって、マタイ16:19に基づいて教皇が解いたり、結んだりしたことを認めるとすると神は悪魔に従わねばならないとの意)となる。(前掲資料より)
- (8) 1350年頃生まれ。プラーク大学、パリ大学に学び、神学を修めた。教会改革をめざし、学問的立場からその必要性を主張した。《De regulis veteris et novi testamenti》(「旧新約の規矩について」)が最も有名な著作で、真のキリスト教と偽りのキリスト教を比較し、当時の教会の状態を非難した。そこでは教皇、聖職者、教会制度、教義全般にわたる攻撃が展開されているが、教皇については主の教えを人偽的なものに変えてしまい、信者の霊性を墮落させ、儀式を中心に、形像、聖物崇拜までひきおこしている、さらには自らをキリストよりも高くし、宗規を神の言葉に換えてしまっていると非難した。こうした主張は、その救済策として教会をキリストの神聖と簡潔に復帰させ、制度としての教会を否定、聖書、聖餐の重視へとつながった。当然、当時の教会から反対をうけ、1389年にその主張をひき下げざるを得なくなっている。(山中謙二著「フシーテン運動の研究」聖文舎より)
- (9) 前掲1418年2月22日付教令には、ヨハネス・フスの誤謬についても語られている。同様にしてフスの主張を探ってみると、「聖職者は、教会の破門制裁、停止、禁止の譴責によって、自分の地位を高め、食欲を増し、悪を保護し、反キリストに道を開く」(“De ecclesia” 1413)とある。
- (10) ルターはローマ教皇のことを反キリスト視し、非難をしているが、それは「皇帝に対する抵抗権についての討論」などにはっきりとみられる。ルター研究家フリーデンタールによれば、ルターが登場する前の1515年にヨハネ黙示録から新しい考え方をとり出し、預言的な主張をした(その仲間にいたっては数字による神秘主義にたって反キリストの到来の正確な年を告げていた)ヨアキムの預言がボローニヤで

ツ敬虔主義において靈的に死んだ教会を反キリストとみる靈的解釈がみられた。

このようにみてくると、信仰迫害或いは背教的要素、終末的現象の出現にともなうて、反キリスト論、世の終りを待望する風潮が繰り返し登場してきたことがわかるが、ロシアでも教会分裂とそれに基づく古儀式派弾圧に関連して反キリスト論が種々みられたようである。本稿ではラスコーリニキにみられる反キリスト論⁽¹¹⁾について時代を初期にしぼって究明してみたい。

ロシア史にとって教会分裂のあった17世紀はさまざまな意味において重大な時代であった⁽¹²⁾。つまりリューリク王朝の断絶に続く《動乱時代》を経て、ようやく新王朝が成立するが、その過程では外国との間に緊張関係があった。とりわけポーランドとは西部ロシア、ウクライナをめぐって厳しい問題を抱えていた。宗教的側面に限っていえば、一時西洋の宗教改革の波に押され新教徒が優位に立ったこともあったが、イエズス会の巻き

出版されていた。また1516年にも「反キリストがまちがった教えで世界をどのような罪におとし入れるか」についての小冊子も出ている。ルターはこれらの書やいい伝えにどの程度ふれていたかは定かではないらしいが、これらを通して徐々に教皇を反キリストとみるようになっていった。ルターは歴史主義に立って教皇というものが反キリストに関して古くから言われてきたことに符合すると考えたようである。

(11) ラスコーリニキにとって反キリストの概念が重要であったことは、日常の表現の中にも残っているのでいくつかあげておく（但し、ラスコーリニキ固有の表現）。*антиев-хлеб* (*антихристовый хлеб*) は *картофель* を意味する他、*прививная оспа* は *антиева печать* である。このほかにも、“*гражданская грамота от антихриста*,” “*клеймо на мере и весах*” (= *печать антихристова*), “*печать на паспортах*” (= *клеймо антихриста*), “*перепись народная от антихриста*,” “*для взимания дани с живых и с мертвых*,” “*у антихриста дышловая колесница*” などの表現がある。なお、ポーランドに移り住んだラスコーリニキの言語方言に関する研究に、*«Słownictwo Rosyjskiej Wyspy Gwarowej Staroobrzędowców Mieszkających w Polsce»* (Polska Akademia Nauk, Instytut Słowianoznawstwa) 1983がある。

(12) В. О. Ключевский *«Курс русской истории»* Т. 3 は、その全体が17世紀に関するもので、クリュチェフスキーが17世紀をロシア史にとって重大な意味をもつものとしていたことがうかがえる。

返しにより再カトリック化が進んでいたポーランド⁽¹³⁾は16世紀末に政治的力をも背景にしてロシアのカトリック化を狙い始めた。西部ロシアはその前線に立たされ、1595—96年に妥協的な合一^{ウーニヤ}を選ばざるを得なかった⁽¹⁴⁾。このことについては後に少し詳しくみるが、ロシアの正教会にとっては第二の離反、背教と映り、脅威と感じとられた。一方、同様にポーランドの支配下にあったウクライナでは正教の方でいち早くカトリック勢力に対抗すべく神学教育が始められ、対抗上カトリック神学の研究も進み、その結果としてカトリックの影響を受けていた⁽¹⁵⁾。そのウクライナがロシアに再

(13) 16世紀、ポーランドはルター派、カルヴァン派の影響を受けた。それはカルヴァン派的傾向をもったプロテスタント系貴族(中でも勢力のあるラジヴィル家の人々)に支持されていたため、政府にもかなりの圧力が及んだらしい。そして、再洗礼派などの教派による活動も活発になり、宗教改革運動の中心とさえなった。しかし、イエズス会士の活動による反宗教改革の動きによって、プロテスタントは大きな打撃を受けた。この動きにはポーランド内の正教徒も力を貸したといわれるが、後には再びカトリックと利害が対立した。

(14) ウーニヤに関する評価は立場によって異なるが、本稿では正教の側からの反対的な気運が紹介されているので、カトリックの側からの文献をあげておきたい。

O. Halecki: *From Florence to Brest, Romae*, 1958

A. M. Ammann: *Der Aufenthalt der ruthenischen Bischöfe Hypathius Pociel und Cyrillus Terlecki in Rom in Dez. und Jan. 1595-1596*, *Orientalia Christiana Periodica*, 1945

Z. De Harlem: *Unio Ruthenorum a morte Sigismundi III usque ad coronationem Ladislai IV 1632-1633*, Tartu, 1936

(15) 17世紀前半のウクライナ正教会はウーニヤ派をはじめとするカトリック側の攻撃にさらされていたため、カトリック神学の方法を援用しつつ、正教の神学的防衛にあたっていたわけで、キーエフに1615年反ウーニヤ・反カトリックの闘いをすすめていたキーエフ同心会の《ギリシア・スラヴ的》学校が生まれた。ここでは教育はスラヴ語でなされていた。一方、モルダヴィア出身の Петр Могила も1631年、キーエフ洞窟修道院に神学校を設けたが、ここではラテン語、ポーランド語で教育がなされた。このため住民からは敵視された(ラテン・ポーランド学校と呼ばれた)。そのため一年後に先の同心会の学校と合併した。モギラ自身も教理問答の形式をとった、いわゆる“正教信仰告白”を1638年ごろまでにラテン語で書いた。正教には欠けていた論理的構成を克服すべく、カトリックの教理問答の形式を踏襲したわけであるが、内容的にも“七つの大罪”の説明などカトリック的であったため反発を招い

併合されたことにより、モスクワの正教会はウクライナよりさまざまな影響を受け、カトリックの脅威がさらに増すに至った⁽¹⁶⁾。そういう中で教会刷新運動が生まれるとともに、典礼書或いは儀式慣習の修正問題が生じ、ニーコンの改革へとつながっていったのが17世紀前半から中盤への動きであった。ロシア正教会にとって17世紀はニーコンの改革をめぐって、ラスコーリニキの根拠となった“ロシア”，正教発祥の地でありながらイスラムの前に陥落した“ギリシャ”，そして反キリストと目され対抗せねばならなかった“ラテン”（ローマ）の3つの概念が複雑にぶつかり合う時代であった。ニーコンによる改革はニーコン自身の失脚にもかかわらず、黙示録の数字を含む1666年及び1667年の教会会議において承認され、あくまでもロシアの古き伝統に立とうとした古儀式派はいわゆる分離派として公教会から弾圧の対象とされたのである。そしてニーコン総主教の政治的野心の反動としてロシア正教会は、18世紀にピョートル大帝の教会改革を受け、遂には国家権力に従属するものとならねばならなかった。

こうした歴史的状況ゆえに17世紀には黙示録に関連した動き、或いは終末論、反キリスト論が登場した。しかし、それらを詳細にみるためには三つの時期に分けて考えてみる必要があるように思われる。すなわちニーコンの改革の前、ニーコンが改革を進めてゆきそれが承認される過程、そし

た。ともかく、キーエフの神学校はかなり程度の高い教育を行ない、Епифаний Славинецкий, Арсений Сатановский, Лазарь Баранович, Игнатий Иевлевич などを輩出し、神学、一般諸科学の面でモスクワに影響を与えたものである。

- (16) 1649年、キーエフ・アカデミーの学長で後にキーエフ府主教となったピョートル・モギーラ（1597—1647）の『簡略教義問答』がモスクワで出版されている。またアレクセイ・ミハイロヴィチ帝の顧問として活躍していた Ф. М. Ртищев はモスクワ近郊にアンドレーエフスキー修道院を設立し、同じ1649年にキーエフ・ペチェルスキー修道院などから30名の修道士を呼んで、モスクワにおける教育（ギリシャ語、ラテン語、スラヴ語の文法、修辭学、哲学などを教える）のセンターとした。従ってここを中心に“ギリシャ”，“ラテン”が学問のレヴェルでモスクワに輸入されてきたのである。このほかにも、キーエフ・アカデミー出身でポーランドにも詳しくあった西方ロシアの Симеон Полоцкий がアレクセイ帝により招かれ、宮廷を中心に“ポーランド”がロシアに浸透した。

てラスコーリニキがセクトに分化していく時期の三つの時代区分である。以下、この時代区分に従って初期ラスコーリニキの反キリスト論を検討してみたい。

ニーコンの教会改革前夜の反キリスト論

《動乱時代》におけるいわば無政府的状况の中では、G. Masaryk によれば民衆の間に千年王国説に基づくユートピア主義があったようである。また、А. И. Клибанов によれば、17世紀前半のユートピア思想は過去を《золотой век》として美化する傾向、закон Правды の支配する遠き地についての伝説や、《救済者》伝説の流布に特徴づけられるという。それらはフォークロアの中に息づいているといわれる。この頃から西洋の側からもロシアに関心が及ぶようになり、ドイツ、イタリア、スペインの作家がロシアに関する情報を発表している⁽¹⁷⁾。それらの中には、偽ドミートリイがユートピア伝説にみられる《救済者》とされていたり、モスクワに何か異変が起こることを予言するものもあった。後者については、イタリアのドミニコ会士 T. Campanella (1568—1639) によるものであり、1618年に書いた《モスクワ大公及び正教司祭への書簡》にみられるという。それによると“1572年モスクワ子午線上のカシオペア座に新しい星がみられました。それは貴国から、驚くべき知らせを告げるものです”とあり、カンパネーラにおいてはそうした星は全世界的規模での変動を示すものであったため、一種の予言ともなったのである。17世紀に現われたユートピア思想は、少し前に現われた理念、Феодосий Косой の《общность имущества》を受け継ぐようなものであったようである。

多少本論からずれたかもしれないが、社会が混乱しているような時にはこうした社会現象がみられることはよくあることで、直接宗教に結びついた形のものではないにせよ社会の底流にあった一つの動きととらえること

(17) スペインでは、セルバンテス、ロペ・デ・ヴェガが、イタリアではカンパネーラが、ドイツでは有名なオレアリウスのロシア、ペルシア旅行に同行した詩人パウル・フレミングがそれぞれロシアに関する情報を作品中にあらわしている。

はできよう。

さて次にそれが終末論的な要素をもったものとしてはどのような形で現われていったかについてみていきたい。

改革前夜のロシア終末論で重要な意味・役割をもっていたのは、いわゆる《Кириллова Книга》(1644), 《Поучения Ефрема Сирина》(1647～1652), 《Книга о вере》(1648) そして Капитон の教えである。

まず《Кириллова Книга》と呼ばれるものは、カトリック及びプロテスタントによる批判から正教を守ろうとするために1644年にモスクワや西部ロシアの多数の著者によって書かれたものが Стефан Зизаний⁽¹⁸⁾ によって編集されたもの（従って正式には《Сборник》1644 года という）である。⁽¹⁹⁾ 全体は48章から成り、反カトリック、反プロテスタント（ルター及び J. Arminius⁽²⁰⁾ が批判の対象となった）的な部分とともに、ローマ教皇を反キリスト或いはその先立ちとしようとするものがある。その中心的著作は Стефан Зизаний によるエルサレムの St. Kyrillos (315—86) の講述解釈で（それ故に《Кириллова Книга》とよばれたのである）、教会にとっての危機的時代の到来が予言されている。聖キュリーロス（エルサレムの主教であったが、アーリア主義の異端思想と闘い3度迫害を受けたといわれる。天にしろしが現われた時、時の皇帝に宛てその意味を考慮

(18) プレストの合同の頃に南西ロシアで活動した。終始ウーニアに反対の立場をとり、その故に主張が異端視されたり、ウーニア派の府主教イパーチ・ポツェイの迫害を受けている。そうした反ウーニア、正教擁護の立場に立って書かれた《Изложение веры》, 《Защита православия от панизма》などの著作が彼によるものである。反キリストは西方より来るとして、ローマ教皇を反キリストの勢力の化身であるとみた。反キリストが勝利を収めるのは7000年代、即ち1492年から2491年までの間であると主張した。

(19) ツァーリ ミハイール・フョードロヴィチの時に、ツァーリの娘の婚約者オランダ王子ウォリデマールが正教信仰の受入れを拒否したため、反カトリック・反プロテスタントの文書として出版されたようである。

(20) 出版されるきっかけがオランダの王子の正教拒否であったため、プロテスタントの中でも、オランダの改革者アルミニウス（1560—1609）の神学が対象とされたものであろう。

した書簡を送ったが、そのことの中には彼が終末に関する問題に関心を抱いていたことが窺がえる。こうした聖キュリーロスの言葉を用いて当時のロシア正教会に対する強い警告的な文書としたものであった。黙示録に従って、反キリストの決定的勝利に終る教会の危機、崩壊、消滅の段階について次のように指摘されている。

キリストの受肉後1000年⁽²¹⁾でローマが西方諸国とともに離反し、1595年に小ロシア住民がローマ・カトリックに接近し、東方教会からの（彼らからすれば真のキリスト教からの）キリスト教徒の第二の離反（後に詳述）が生じた、そして1666年にはこうしたことを防ぐべく、悔改めによって神に憐みを乞うべきであるといったものである。これによると1666年という黙示録の数を含んだ年は正教が受けることになる危機の年として予言され⁽²²⁾、当時の教会指導者に衝撃を与えるとともに、民衆には広く受けいれられていった。

次に4世紀のシリアの禁欲的傾向をもった神学者、詩人エフREM・シリN⁽²³⁾の教えを内容とする《Поучения Ефрема Сирина》は、最後の審判に備えてキリスト教徒としての責務を点検せよというものである。これ

(21) 黙示録20章に展開されるいわゆる千年王国論によれば、神は1000年の間サタンの活動を止めておくため、1000年目にしてサタンはその力を振り出すわけで、そこから1000年という数がち出されているものであろう。東西教会の分離は（正教会からすれば西方のローマ・カトリック教会の正しい教えからの離反と映った）正式には周知の通り1054年であったが、その以前からそうした徴候はあったため、あながち不正確な数ではない。

(22) キーエフのペチェルスキー修道院院長 Захарий Копыстенский も、その著《Палинодия（改詠詩）》の中で反キリストの出現の年を1666年としている。この書は1620—22年に書かれたものである。

(23) メソポタミアのニズィビア市出身の地主の子（4世紀）。若い頃は無分別であったが、羊を盗んで獄に入り、改心した。その時神の声を聞いたという。ニズィビアのヤコブのもとで聖書を学び、363年ペルシアに占領されるまで山で苦行した。その後も山に住んで人々を教えた。聖書注解などの多くの著作を残しているが、それらはギリシア語に訳されて教会で読まれた。感動的祈り、讃美歌、懺悔の祈り、禁欲主義的性格をもつ作品で知られている。

は1647年2月1日モスクワの《Печатный двор》より発行され、以後52年にかけて4版出ている⁽²⁴⁾。

38番目の《Слово на пришествие антихриста》では次のように語られている。蛇が降ってくる時、地には平安がなくなり、騒乱、死、飢えが起こる。従って祈りをもって備え、誘惑に勝ち、固く立ち続けよ、なぜならその獣は全ての者を滅ぼさんとて、その刻印を押そうとしているからだ。⁽²⁵⁾ その時には全地に嘆きの声が響き、教会も大いに泣き叫ぶといったことである。ここには、世の終りを強く意識した上で禁欲的生活を追求しようとする姿がよく表わされている。このような傾向は当時のロシアにもみられたので大きな影響を及ぼしたに違いない。

さらに1648年に出た《Книга о вере》も前二者とほぼ同様の内容をもつものとして、モスクワで編まれた。これは主として西部ロシアの Нафанаил⁽²⁶⁾ (キーエフのモギラ修道院管長) の著作から成り、西欧の神学と論争を行ない、正教の教えを解説したものであった。最後の部分には特別

(24) 1649年に2版出ているが、Аввакум も С. Вонифатьев から1647年か48年の最初の出会いの時にこれをもらっていると K. N. Brostrom は推測している。ロシア以外でも宗教改革や、反宗教改革の波にのまれていた西ヨーロッパでも多くの人々が影響を受けていた。フランスでは宗教改革以前に出版されている。また宗教改革期には エフレム・シリノフ の著作のラテン語版、フランス語版が少なくとも6版出ているといわれる。

(25) 黙示録13章16～17節には次のようにある。「¹⁶ また、小さな者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しきものにも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、¹⁷ この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもしないようにした。この刻印はその獣の名、または、その名の数字のことである」。

(26) 《Книга о вере》(正式には《Книжницы или описания о вере православной, о святой церкви восточной, об изряднейших православных артикулах, от божественного писания, путного ради случая, в гонении от нужды собранной》である)の著作で有名であるが、ここではカトリック及びウーニア主義者を批判の対象としている。ギリシアの権威についてはこれを肯定しているため、古儀式派とは一致しなかったが、古儀式派の主張(殊に儀式に関して)を認める内容もあったことから、古儀式派によく用いられた。

の章が設けられ、世の終りと反キリストの勝利が扱われていた。西方より正教の危機が迫り来るとの認識を背景に、正教防衛の書として多くの人たちに購入されたようである⁽²⁷⁾。加えて重要な意味をもつのは、先の書とともにニーコンの改革前夜の教会内改革者たち、Иван Неронов や Стефан Вонифатьев らに指導されたいわゆる боголюбцы (ニーコンも当時このグループに属していた) の動きがある頃に出版されていたわけであるから当然本書はこの運動に多大な影響を与えたに違いないという点であろう。

以上の書物が西部ロシア系の編者或いは執筆者によるものであることは象徴的である。つまり、先にもふれたようにウーニアが成立したのは西部ロシアであり、それがイエズス会の活動を通してのローマ・カトリック陣営によるロシア・カトリック化の一環であったため、正教の守護者をもって任じていたロシアの正教徒たちからすれば、西方よりの危機の切迫と映ったに違いない。その意味でこうした書が出されたのは必然的であったとさえいえるのである。

最後に、17世紀のロシア終末思想に非常に大きな影響を与えた人物として Капитон がいる。詳細はあまりよく分っていないが、青年時代をカピトンのもとで過ごし、その伝記を書いた старец Корнилий によれば、いわゆる動乱時代の最中又はそのあと、ヴォーログダの東110露里ほどのところにあった Преображенский обитель (скит Преображения Христова) で極端な禁欲主義を説いていた⁽²⁸⁾。1620年代の末或いは1630年代の

(27) 《Каталог книг кириллической печати XV-XVII вв.》 (изд-во МГУ, 1980) によれば、出版は1648年5月8日 (“Печатный двор” より) である。6月22日に発売され、初日に118部売れ、続く3ヶ月間に850部以上売れたという記録が残っている。なお1594年に亡くなった正教神学者 Герасим Смотрицкий の詩《Предсловная сказания》を、最初の古儀式派詩人アフナーシィ (修道士アヴラーミィ) は《Книга о вере》を通してマスターしたという。

(28) コルニーリィによると、カピトンは修道院の規則に反して、かかとまである長い修道服ではなく、腰までの短い外套様のものを着用し (従って腰から下は寒さに対し無防備であった)、また鉄の鎖を身につけて自らの肉体を痛めつけていたといわれる。

初めにそこを離れ、南へ100露里ばかりいったところのコレースニコフ付近に新しいスキットを創設した。1634年に当時のツァーリ、Михаил Федорович はカピトンのことを知っていたようで、関心を示したのか、勅令をもってスキットを認可し、隣接地の利用さえ許可した。このため繁栄し、ダニーロフやコレースニコフからさほど遠くないところのモローゾフに女子の修道院をも建てている。10～15人の修道女が集まってカピトンのもとに禁欲主義的生活を行なっていたといわれる。正教、殊にロシアに入ってから正教で、その風土的特色もあってか発達したヘシカスムの一例であろうが、С. Зеньковский によれば、カピトンは自らの個人的“救い”を求めていただけではなく、弟子の獲得養成をも意図していたようである⁽²⁹⁾。そのことは実際に Капитоновщина (лесные старцы) という一団が形成されたことにも、熱狂的終末論的禁欲主義が民衆や後のラスコール運動に影響を与えたことから明らかである。ところが1639年になると総主教 Иоасаф がコレースニコフ、モローゾフの両修道院の閉鎖を命じたため、修道士たちは近隣の修道院の監督下におかれることになった。カピトン自身はヤロスラフ救世主修道院へ移されることになったが、事前に情報を得て難を逃れた⁽³⁰⁾。そしてザヴォールジエの奥深い森(ヤロスラヴリとコストロマーの北)にこもって禁欲生活を続けた。1651年頃政府の逮捕命令が出たが、このときも知らせがあつて逃げることができ、再びザヴォールジエに、或いはさらに南に下った。以後の活動については政府、教会とも知らずじまいであったようだが、カピトンはそこでも自説を伝え続け、かなりの数の弟子を獲得したといわれる。こうしてカピトンは、終末を意識して、断食などの厳しい禁欲生活を自ら行うとともに⁽³¹⁾、従ってくる者に

(29) С. Зеньковский «Русское старообрядчество», München, 1970, стр.147

(30) こうした迫害の故に後に古儀式派は“первый за веру стоятель”と名づけたといわれる。

(31) コルニーリイ、修道士であり古儀式派に属していた Евфросиний、後のパモーリエ派の指導者の一人 Семен Денисов などの伝承によると、カピトンは立って眠ったといわれる。しかもその時間は極めて短かく、ほとんどの時間は祈り、詩篇を読むこと、労働に費した。肉体には前後1プード半の石板までさげるようになり、

もそれを要求した⁽³²⁾。この教えは弟子たちによりさらにラジカルなものとして伝えられていったが、後に詳述する。

このように、ニーコンの教会改革の前のロシアには終末論的風潮がかなり強くあったということになる。それは西部ロシアより正教に対する危機が迫ってきていたからである。コンスタンティノープル陥落200年を経たこの時期、ロシアはいわゆる《モスクワ＝第三のローマ》を意識して、正教の守護者をもって自任する傾向がかなり強く⁽³³⁾、東西教会の分裂、そして正教徒を惑わすイエズス会士らによるカトリックの攻勢をふまえて、黙示録をいわば歴史主義的に解釈して反キリストの到来、世の終りについて予感したのであろう。そして1666年を重大な鍵を握る年として予告したのである。その予告はラスコールの発生という意味では一部現実化したのであり、ラスコーリニキの反キリスト論とも密接な関係をもつにいたったのである。

ニーコンの教会改革をめぐって

教会改革といっても教義に関するものではなく、結果的には正教信仰を具体的に表現する場としての典礼及びそれに関連する文書、その他の信仰上の慣習についての修正或いは改変であった。これらの修正については、

パスハやクリスマスでさえ пост を続け、徹底して自分の体を痛めつけた。

(32) ことに пост に対しては厳格で、正教会では一時緩和されたり、中断される大祭中でさえ、“кроме «семен, ягодичия и прочих, растущих на земле»” という形で一切の食物を口にすることを禁じた。時に弟子たちがチーズ、バター、魚などを食することを求めた場合でさえ、禁じたといわれる。

(33) 当時ロシアの教会の過去に対する関心も高まり、14世紀末に Епифаний премудрый により書かれていたトロイツェ・セルギー寺院の創設者 св. Сергей 及び св. Никон の伝記が出版されている（《Службы и жития Сергия и Никона》，М., Печатный Двор, 1646）。それは同寺院にいた Дионисий премудрый の門弟の1人であった Симон Азарьин が補足を加えて編集したものである。アザリインはこのあとさらにネローノフの強い求めで両者の師 Дионисий の伝記を書いた（1652年に И. Наседка の援助を得て完成したが、実際に出版されたのはロシア教会の分裂があったために、ニーコンの改革後だいぶしてからであった）。

先にも少し触れたようにそれが正教の形成されたギリシアの文書、伝統に基づいてなされた上、実際的にはカトリックとの対抗上カトリック神学についても研究をしていたウクライナ出身者がこの事業に携わったために⁽³⁴⁾、伝統を重視する正教の特色及びソロヴィヨフも指摘するような全般的教育水準の低さ⁽³⁵⁾ともつながって（一度ロシアで定着した伝統は改めるべきではないとする考え方⁽³⁶⁾には、“伝統”のもつ意味を誤解しているような面もみられるが、しばしば人間の犯しやすい誤りであろう）、大きな反発を招いたのである。すなわち、あらゆる意味での改変を嫌う風潮に、反カトリック感情及び“第三ローマ論”が加わったのである。こうした状況のもとに教会改革に反対する運動が陰に陽に起こり、1666年—67年の教会会議で改革が承認され、ラスコーリニキが生み出されていく過程でも反キリスト論、終末論が登場してきた。その際、社会的には消極的な運動となった黙示的熱狂主義、終末思想と、ニーコン及びその修正事業を承認したツァーリに対し積極的抵抗運動を指導したアヴァクームを始めとするラスコーリニキの指導者たちの主張に分けて考えてみたい。

(34) 1649～50年にキーエフから学僧 Епифаний Славинецкий, Арсений Сатановский, Дамаскин Птицкий がモスクワに招請され、福音書の翻訳（ギリシ ャ 語からスラヴ語へ）が始められた。彼らはキーエフのブラツキー修道院付属宗教アカデミー及びペチェルスキー大修道院に属するものであった。

(35) С. М. Соловьев: “История России с древнейших времен” т. 11. стр. 201

(36) 正教において“伝統”（聖伝）は聖書と並び、いわば車の両輪の形で信仰の真理を伝え、育てていくものとされる極めて重要な概念である。T. Ware は、“伝統”について Tradition と traditions という語を用いることによってその二面性を表現している。つまり“伝統”は抽象的にとらえるべきものであると同時に、具体的でもあるというのである。その際、後者においてはここで問題になっている信仰生活上の慣習や制度もそのカテゴリーに入れられた。そのため、一度慣習となったものは改変されにくくなり、そのまま踏襲されていったのである。こうした点に実はロシア教会のシスマの問題点があるのである。古儀式派たちにすれば、教会の過去の聖徒たちが守っていたことを変えてしまうことは、その信仰や、聖性を否定することになると考えたのであり、“伝統”を一面的にのみとらえるという陥りやすい誤りを犯しているようである。T. Ware もそのような意味での誤謬の例として古儀式派の主張をあげている。

まず Капитоновщина と呼ばれる一団における終末思想についてみたい。これは1650年代の初めに、先に紹介したカピトンとともにコストロマー周辺からヴォルガ以南ウラジーミル付近のヴァズニキの森深く移り住んだ一団で、住んでいたところから《лесные старцы》と呼ばれる。元来終末思想に基づく極端な禁欲主義に立っていたカピトンやその門弟たちは、修正事業が始まるや、“終りの日”，“反キリストの到来”そして“背教”についていよいよ語り始めた⁽³⁷⁾。60年代に入るとクシャロ湖近くのヴァズニキの森には、彼らや遍歴主義者、修道士、修道女の完全なコロニーができあがっていった。それは“666”を帯びた1666年が近づくにつれて反キリスト到来を予感したからで、その数は数百とも数千ともいわれる。多くは教会に行かず、聖餐も受けず、世と教会権力から身を隠していたのである。いわば逃避型の対処法であった。カピトンのあとは、Вавила, Леонид⁽³⁸⁾, Василий Волосатый, Капитолина, Евпраксея などが教えを継承し、運動を指導した。彼らは歴史的切迫性を感じたのか、カピトンよりも極端な主張をした。すなわち、カピトンが水、金、土の日に食物を断つという精進を勧めていたのに対し、彼らは постоянный пост つまり完全に食を断つことさえ訴えたのである。これは飢えによる自殺に通じるものであった。⁽³⁹⁾ 事実そのような教えのもとに、何百、何十人の人々が

(37) プロストロムによれば、この頃、すなわち1654年7月から12月にかけてモスクワや他の都市にペストが流行し、モスクワの住民の多くが死んだ（15万人以上）というが、事実なら大変なことで、人々は終末の前兆を強く意識したことであろう。しかも、そのペスト流行中の8月2日には日食もあったというからなおさらのことである。また、クリュチェフスキーによると、その年ニーコンが新画法のイコンを各家庭より探し出し、公衆の面前でそれらに侮辱を加えた上、そうしたイコンを描くものは厳罰に処すとの勅令を出したあと、疫病と日食があったことから、民衆はそれがニーコンの不敬のせいであるとしたといわれる。

(38) ゼンコフスキーによれば、Вавила には “《парижская академия》の生徒であった”，Леонид には《дивный》という説明、形容がつけられている。

(39) 19世紀のラスコール研究家 П. С. Смирнов によると、カピトンの精進断食主義を極限にまで至らしめたのが Василий Волосатый で、救いを達成するには《пощение до смерти》（徹底的に精進をまもって死ぬ）という行為が必要であるとし

自殺的な死を選んでいったといわれる。非常にファナティックな現象であったが、そこには一種の理由づけがあった。本来キリスト教信仰では自殺は否定されているが、この《自殺による死》はかつての殉教者 St. Loukianos のたどった道を歩むものとして正当化されたのである⁽⁴⁰⁾。他にも魂の誘惑にうちかつため川に身を投じたとされる St. Domnina⁽⁴¹⁾ とその娘クセニヤとプロスクディア、同様にナイフで自らの命を絶った St. Sophronia⁽⁴²⁾ の例が正当化のためにひかれた。

そしてさらに驚くべきことには、反キリスト到来が予期された1666年を目前にしたとき、身を罪から浄める次のような恐るべき方法が考え出された。それは страшная огненная смерть であった。後にラスコーリニキ無僧派のフェオドーシイ派やフィリップ派にもこのような行為があったが、その先駆けとしての現象であった。集団焼身自殺がいくつかの記録に残っている。ゼンコフスキーがあげている例だけでもかなりある。一例だけ紹介しておく、ヴォーログダで調査にあたっていた司令官 C. A. Зубов の報告(1666年3月)は次のように伝えている、「昨年、懺悔も 聖餐もせず男女9名が自殺した。そして今年になって3月に4人がイズバーに乾草を運び入れ、それを積み上げたうえで中に閉じ籠った。そして中から火をつけて焼身自殺をした。さらに7人が人目を避けて真夜中に村を出て、畑

た。カピトンが教会の僧職制度が救いにとって不可欠であるとのことを否定したことからヴォロサーティの教えも後に нетовщина の名を得る無僧派の一派の間に支持者を得た。また徹底して古儀式に依拠したため、このグループは自らを《旧信徒》(あらゆる旧信徒は当時《カピトン派》と呼ばれていた)といていた。

- (40) 有名なイオアン・ズラトウストによると、312年皇帝マクシムの時、ルキアノスは異教の神を礼拝することを拒否して、獄舎の中で断食し、殉教の死をとげたといわれる。
- (41) 富裕なローマの婦人であったが、侮辱しようとした兵士たちから逃れるため、娘クセニヤ(ヴィリネヤ)、プロスクディアと海に身を投じた。記念日は10月4日。
- (42) 殉教者聖ソフロニアについてはよく分っていないが、ここに紹介されている死については、Евфросин 《Отразительное писание о новоизобретенном пути самоубийственных смертей》(1691), 22に紹介されているという。

に行き、自ら火をつけその中で焼け死んだ⁽⁴³⁾。

Капитоновщина をさらに極端にした Волосатовщина の教説については、その基盤に反キリストの王国到来ということがあり、反キリストの君臨を暗示する目にみえる徴としてあげられたのは、信仰を守っている者に対する迫害であった。“самоистребление”⁽⁴⁴⁾ を信仰に変わる献身行為、水による洗礼に変わる《第二の洗礼》とし、《罪を浄める》手段としての《懺悔》にとって変わるものとした。反キリストの刻印はどんなことをしても逃れることができないからとして、各人に требование を要求した。こうして самоистреблениеこそ反キリストの刻印を逃れる唯一の手段とされたのである⁽⁴⁵⁾。

こうしたグループのほかに、ヴォルガ左岸、ニージニ・ノヴゴロドの北のケルジェーニェツにも、以前より住んでいた隠者のところへ教会反体制者が迫害を逃れて住みつくようになり、新しい集落が生まれた。この地に形成されたグループの特徴は、穏健な保守主義であった⁽⁴⁶⁾。最初の移住者 Ефрем Потемкин⁽⁴⁷⁾（かつてはビジュコフ修道院の修道士であった）の唱えた反キリスト論は次のようなものであった。反キリストは既に到来しており、それは総主教ニーコン以外の誰でもない、反キリストは教会を汚

(43) ニジェゴロドでも、銃兵隊が来たとき僧庵にこもって火をつけ集団焼身自殺をしたとの報告が малый Сенька という人によってなされている。

(44) П. С. Смирнов によれば、самоистребление には、самоуморение（自己の体をいじめぬく）、самозаклание（針やナイフなどで自分の体を突いて死ぬ）、самоутопление（入水）、самосожжение（自焼）があった。

(45) 1685年の указ 発布以後北部地方を中心に多発した。1687年 Березов（オロニェツ地方）でピーメン某を筆頭に1000人以上が焼身自殺した。また、同年パレオストロフスキー修道院（オネガ湖の最北端の島にあった）では、修道士イグナーチイが2700人のラスコーニキとともに焼身自殺をしたという記録が残っている。シベリアでは1679年にドメチアンが1700人の犠牲者があったとして紹介している。

(46) 17世紀末には、ラスコーリニキでも穏健な《僧侶派》の中心となった。

(47) Спиридон Потемкин の兄弟で、かつてはビジュコフ修道院にいた。1662年頃同僚とともにケルジェーニェツに来て、群を指導した。1666—67年会議では、その極端な考え方を改めたといわれている。

した、そのため болото のみが《汚されることなく》残っているから、そこへ行くべきであると訴えた。しかし、《最後の背教》が既に来ているとの確信はなく、1666年の教会会議では自らの極端な考え方を改めたといわれる。この種の穏健な方法には、未開の森や荒野に逃げるということのほか、国を捨てポーランド、スウェーデン、プロシア、トルコなどの外国へ移住するということがあった⁽⁴⁸⁾。

さて、ニーコンが新しい制度を実施に移したときそれに反対する陣営で当面中心的な役割を果たしたのは、イヴァン・ネローノフであった⁽⁴⁹⁾。な

(48) 当時ロシア領でなかったバルト沿岸地域には迫害を恐れようとして人々が逃げていき、ラスコーリニキの大きな中心となった（現在も同様にラスコーリニキの中心となっている。これについては筆者による『現代の古儀式派』中京大学教養論叢24巻3号を参照されたい）。ポーランド領となっていたところが多く、とりわけポーランドはラスコーリニキの発展と関係が深い。そのためポーランドではラスコーリニキ関係の書が多く出されている。

(49) 17世紀中葉のロシアの宗教的覚醒運動における先駆的存在で、“ロシア宗教改革の父”ともいわれる。1590年又は91年、ヴォーログダ近くのロム村の聖救世主修道院がヘシカストたちによってつくられたが、ネローノフはその創設者イグナーチ長老と交わりつつ育ち、影響を受けた。その頃から真の正教徒のモデルを意識した。そしてロシアを古きロシアの正教の理想へ導き、教会をロシア人の生活のすみずみに貫かせ、それによってロシアが真に第三のローマとなるように願った。彼は修道士のように魂の救いのために世を捨てることはしなかった。当時のロシアの宗教文化の中心であったトロイツェ・セルギー修道院長ジオニーシはネローノフの才能を認め、1630年彼をニージニ・ノヴゴロドの教区につけるようにした。この頃からネローノフはモスクワにも知られるようになった。名説教家でもあったといわれる。1632年ロシアがポーランドと戦争しようとしたとき、それを非難したため北部地方に追放された。総主教フィラレートの死後（1633年）まもなくニージニ・ノヴゴロドに戻り、教会及び教会人の生活の革新運動を続けた。1649年には赤の広場のカザン寺院（聖ヴァシーリイ寺院）の長司祭となる。その後も боголюбцы の指導者として活躍し、ニーコンの改革には公然と反対した。そのため1653年再び北へ流された。そこから逃れると最初はソロフキーへ行き、そのあとモスクワに戻った。1656年に教会から破門されて以来10年間位の間に徐々に改革を認めるようになっていって、1667年には転向しペレヤスラーヴリ修道院長に任ぜられた。1670年没。アヴァクームはネローノフを高く評価し、その妥協に対して他の古儀式派指導者が非難をしたのに対し、一切非難しなかったといわれる。

ぜならば、ニーコンが1652年に総主教となり、54年会議で祈禱書の修正が正式に決定された頃には、Аввакум は遠くシベリアへ流刑になっており (1653年9月より)⁽⁵⁰⁾、ロシアの古き伝統を重視して闘っていたコロームナの主教 Павел⁽⁵¹⁾、コストロマーの Даниил⁽⁵²⁾、Логгин⁽⁵³⁾ は既に亡

(50) アヴァクームは1653年9月モスクワから追放されて以来 (当初ニーコンはレナ川への追放を言いわたしたが、ツァーリがトボリスク行に処分を緩和した。かくてアヴァクームは妻、9才のイヴァン、5才のプロコーピイ、生まれたばかりのコロニーイ、8才の娘アグラフェーナ及び姪マリーナとともに、秋のぬかるみの道を苦勞して進み、12月の末ようやくトボリスに到着した)、10年8月間モスクワに戻れなかった。アヴァクームがモスクワに帰還した1664年 (2月から5月のいつか) 頃にはネローノフは反教会の立場について疑問を抱き始めて、闘いから離脱していた。

(51) ヴォルガ上流地方の生まれ。1652年10月17日主教となる。1654年の教会会議では、ただ1人古儀式擁護を主張し、ニーコン及びアンティオケ総主教マカリオスの前で、エフレム・シリーンの祈禱文朗読の際なされる礼の変更 (17回の深い礼を4回の深い礼と13回の腰までの礼に変えた) に反対を表明した。恐れを覚えたニーコンはコンスタンティノープル総主教パイシオスに手紙を送って、自己の改革への助言を求め、パヴェール主教とネローノフ長司祭の抵抗のことを論じている。それに対しパイシオスは破門するように勧告した。パーヴェルは逮捕され、最初はオネガ湖上のパレオストロフスキー修道院、次いでノヴゴロド近郊のフティンスキー修道院へ追放された。そこでは院長からひどい鞭打ちにあわされ、ニーコンの使者により火刑に処せられた。ニーコンが1666—67年会議で失脚したとき、パーヴェルに対するこのひどい仕打ちが言い添えられたといわれる。ラーザリの言葉によると発狂したといわれ、アヴァクームによると火刑にあわされたという。

(52) コストロマーの長司祭で、боголюбцы のサークルのメンバーとしてネローノフ、アヴァクーム、ゲラシムらと教会の刷新運動に取組んだ。教職、信徒の道德性を高めること (例えば飲酒、泥酔を戒めた)、当時は礼拝が многогласие (会堂内で各奉仕者がそれぞれの奉仕を同時に行なっていたため秩序はなく騒然としていた) に対し единоголосие を主張するなど敬虔を求めることに尽力した。大体アヴァクームと行動を共にし、ネローノフが1653年に逮捕され、流刑になったときも、直ちに訴状を送ったため、アヴァクームの『自伝』によると、ニーコンによってトヴェーリ門外の修道院で捕えられ、ツァーリの面前で断髪 (破門を意味した) され、外套をはぎ取られ、チュードフ修道院のパン焼き小屋へひきたてられたうえ苦しめられたという。その後アーストラハンへ流された。そこでは土牢に閉じこめられていたが、その土牢で死んだといわれている。

(53) ログギンは、生まれは農民の子であったがムーロムの長司祭となり、боголюбцы

くになっており、ツァーリの懺悔聴聞僧スチェファン・ヴォニファチエフは総主教との衝突を避けるようになっていたからである⁽⁵⁴⁾。また、他の боголюбцы も沈黙、或いは教会規律違反を理由に流刑になったりしていたうえ、修正事業に反対の立場をとっていた4人の主教、ノヴゴロドの Макарий、ヴォーログダの Маркер、トボーリスクの Симеон⁽⁵⁵⁾、ヴァトカ

の最も屈強なメンバーの一人であった。彼についてはアヴァクームの『自伝』に興味深いエピソードが残っている。捕えられた後、ニーコンによりミサの最中にツァーリの前で断髪させられ(1653年9月1日)、さらには法衣、カフタンをはぎとられた。ロッキンはじっとにらみつけ、ニーコンをののしって顔につばを吐いた。さらに下着を脱ぎ、それをニーコンの顔めがけて投げつけると、その下着は不思議にも広がって、聖餐布のように祭壇の paten を覆ったというのである。この事件についてアヴァクームは1653年にネローノフへ書き送った手紙では触れずに、下着のまま教会からひきづり出されたかのように書いていた。しかし、『自伝』には上記の通り書きしるしているのである。さらにロッキンは“裸で”牢に投げ込まれたと書き、全く逆のことを書いているが、何故そのような変化が生じたのか、興味深いところである。

- (54) ヴォニファチエフについてはあまりよく分っていないが、生まれはネージニ・ノヴゴロド地方。後にモスクワの受胎告知寺院の長司祭で、かつアレクセイ・ミハイロヴィチ帝の懺悔聴聞僧となる(1645—52年)。第三のローマ、聖なるロシアの理念がその政策を支配していた頃の若きアレクセイ帝に、宗教政策などの面で大きな影響を与えた。彼はネローノフと親しく、боголюбцы 内で指導的役割を果たしていた。民衆の苦しみを理解し、支配階級の乱費を削減して事態の改善に努めたといわれる。アレクセイ帝の結婚に際しては、従来の半ば異教的な大騒ぎをやめさせ、壮厳かつ霊的に行なわせたという。ニーコンが総主教の座についた(1652年)あと、彼の影響力は減少した。ニーコンほど野心的でなかったためであるが、彼はかつての боголюбцы の同志が逮捕されたときには、彼らをできる限り擁護した。しかし1656年ヴァルダイ湖のイヴェールスキ修道院でニーコン監視のもと亡くなった。

- (55) トボーリスク及びシベリアの主教で、出身はアヴァクームと同じヴォルガ上流地方。アヴァクームやラーザリに対しては、彼らがトボーリスクに流刑になっていた頃(アヴァクームは1653年12月より1655年6月29日までトボーリスクにいた)懇意にした。典礼書改訂が始められた1654年のモスクワ会議には出席している。そして同年の日食を目撃している。そのことをトボーリスクに戻ってアヴァクームに教えたものであろう。アヴァクームは『自伝』において、ディオニシウス・アレオパギータを引用して、その日食現象を神の怒りのあらわれであると述べている。

の Александр も敢えて総主教，ツァーリに反旗を翻えそうとはしなかった。

ネローノフは1653年にやはり流刑に処されたが，なお反ニーコンの活動を活発に行なった。彼は典礼に関する新しい制度に反対しつつ，教会及び社会の倫理確立という改革者の立場を貫き，流刑先の修道院でも院長の反発をかい，さらに白海に浮かぶカンダラクシスキー修道院へと移された。その途上ヴォーログダに立ち寄り，反ニーコンのキャンペーンを展開し始め，1654年7月18日に宣言書の形をとった書簡をモスクワに送ったのである。⁽⁵⁶⁾ そこにはニーコン及びニーコンによって導入された新制度に対する宣戦布告とともに，反キリストの毘に対する諸勢力の動員へのアピールが盛りこまれていた。《あらゆる神の武具を身にまとい，悪魔の毘に対して立ちあがることができるように……》と訴えた。ネローノフはカンダラクシスキー修道院に一時滞在したあと，1655年8月10日にソロヴェツキー修道院に移った。ここでの滞在期間も短かったが，それは大きな意味もっている。つまり後に古き信仰と伝統を旗印にした最も激しい反総主教，反ツァーリの闘いの拠点となるソロヴェツキー修道院に，そうした動きの素地を生み出したのがネローノフであったからである。その後はモスクワにひそかに戻り，1年間反ニーコンの活動を行なった⁽⁵⁷⁾。1655年のクリスマスに彼はダニール修道院に入り старец Григорий となった。こうしたネローノフの反ニーコン闘争に対してニーコンのとった措置は，1656年5月18日付の破門と，同年2月，4月に出されたニーコン及び東方の総主教たち（アレクサンドリア総主教マカリオス，セルビア総主教ガヴリーロフ）によるいわゆる двуперстие への呪咀宣告であった。これに対し，

(56) 1653年から1664年の間にネローノフは何度もツァーリに対し，ニーコンの政策が継続されるならロシアには天災が降ると警告を発している。アヴァクームは『自伝』の中で，この予言的警告をエレミア記24：10，エゼキエル書14：21を想起して，引用している。

(57) 1年間穏れて活動できたのは，当時もなおツァーリの名目上の懺悔聴聞僧であったスチェファン・ポニファチエフがネローノフにニーコンとの和解を説得しながらかくまったからであった。

ニーコンと反対派の溝はいよいよ深まり、古儀式派はニーコンを異端とし、反キリストに仕える下僕と断罪した。この頃からニーコン＝反キリスト論が噂として広がるようになっていった。ロストフではネローノフのグループがその地方の司祭の賛同を得て、ニーコンの所業に反対する宣言が出された。それによれば、教会会議は異端の徒の手中にある、ロストフの府主教及びその《父》である総主教は呪うべきやつだというのであった。

また1655年—56年に彗星が出現したこともあって⁽⁵⁸⁾，“それは総主教が正教の信仰を裏切ったことに対する神の怒りのあらわれだ”との噂が流れ始めた。そして次々に不思議な幻が見られたとの声があがった。後に北部地方のラスコールの指導者の1人となった長老コルニーリィは、次のように言った；

「私は夢の中で、自分がウスペンスキー寺院にいるのを見た。そして2人の《見知らぬ人》に気がついた。1人は端正な姿の人で古い *восьми-конечный крест*⁽⁵⁹⁾ を持ってこう言った——

“これが真の十字架である”と。

もう一人は薄暗い姿の人で、手に新しい *четырёхконечный крест*⁽⁵⁹⁾ を持ってこう言った——

“これからはこの旗印を尊ばねばならない”と」。

同じくヴォルガの農婦 Иустина も幻を見たとして、次のように語った；

「夢に現われた聖イグナーチ様が私に新しい書を確認してみるように

(58) 旧約の世界には、異教的なものとして批判する形で、星の動きをみて運命を考える習慣（例えばエレミア7：18，44：17—18，エレミア10：2など）がしばしば登場してくるが、それらは罪惡とされた。こうした考え方は長く否定されつづけた。新約においても世の終りの前兆の一つ（マタイ24：29の“星は空から落ち”）と結びつけられた形で登場してくる。

(59) 西方キリスト教界では4つの端をもつ十字架が用いられたが、場合によって6つ或いは8つの端をもつ十字架が使用された。正教徒の間でも同様に3つの形が用いられたが、古儀式派によれば8つの端をもつ十字架のみが正しいもので、他は異端とされた。そもそも十字架はコンスタンティヌス大帝の母ヘレナが326年聖地を巡礼し、地中より3本の十字架を発見した（しかもキリストの頭上にあった罪状の入った名札及び釘も見つかった）との言い伝えから本格的に発展したのである。

申されたのです。そしてその新しい書を総主教アレクシィーさまの棺の上に置かれました」⁽⁶⁰⁾

старец Онуфрий も同様の幻を見たといわれる。それについてこう述べた；

「使徒パウロが私に現われました。そこには明るい光の中に公正な僧正のあらゆる徴がありましたが、もう一人ニーコンもありました。ニーコンは《全身が暗く曇って》いました」

こうしてネローノフが反ニーコン、反新制度の闘いを宣言した結果、まだ十分な理論づけはなされていないものの、反キリスト論がニーコンと結びつけられて登場してきたわけであるが、古儀式を奉ずる立場からすれば、自分たちを破門し、自分たちの十字の切り方を呪詛したニーコン⁽⁶¹⁾は、背信行為、即ち正教の敵の手先とする見方が生まれてきたものである。感情的傾向の強い反キリスト論であり、上記の“幻”に物語られている図式もやや単純に過ぎる面もあるが、旧約聖書にはしばしば夢の謎解き⁽⁶²⁾がみられることからすればそれなりの説得力をもち得たことは想像できよう。

改革を行なったニーコンは、総主教の権威をツァーリの権力に勝るものとしようとしたことの故に、1666—67年の教会会議で古儀式派指導者たち

(60) この話は、《Материалы для истории раскола за первое время его существования》，ред. Н. И. Субботин, М., 1875-1890, I-IX の I, 204, VII, 35-40 にある。

(61) クリュチェスキーによれば、ニーコンは教会と和解したあとのネローノフとの対話の中で、実際には2本指で十字を切ろうと、3本指によって切ろうとどちらでもよく、教会権力への敵対こそが問題なのであると言ったといわれる。仮りにそれが事実であったとすれば、ニーコンは改革事業をかなり非宗教的な動機で行なったことになる。つまりは権勢欲と個人的野心によっていたとも考えられることになる。しかし、その動機、意図は何であれ、一度ロシアでそれまで守られてきたものを改変した以上、その事実が問題になるのであって、古儀式派にとってはその事実の故にニーコンが背教者となったのである。

(62) 旧約のダニエル書4章4～27他。

とともに断罪され、失脚した⁽⁶³⁾。しかし彼が進めた改革（正確に言えば修正）事業は承認された。

ニーコンが失脚したあとは、ツァーリに古い規則への復帰を期待する請願書が数多く寄せられた。憎むべき修正（古儀式派からすれば改変であった）を指導してきたニーコンが失脚したとなれば、その修正も教会会議で承認はされているが、撤回される余地があると判断したからであろう。その中には修正事業を深く調べあげた優れた神学的著作もみられたようであり、次にはそうした著作にみられる反キリスト論を検討してみたい。

その一人は Спиридон Потемкин⁽⁶⁴⁾ である。彼はその著《Слово на Еретики》⁽⁶⁵⁾ で、論理的・神学的に儀式改変の問題をとりあげ、その上で“背教”を考慮にいったあと終末論、反キリスト論を展開したといわれる。ゼンコフスキーによれば儀式の問題については感情的な個人攻撃を避けつつニーコンの新制度を批判しているという。さらにそれは次のような根拠に基づいている。教会は過ちをおかすものではない、また聖なる教義から離れる筈がない、従って教会は自身ではいかなる修正をも求めはしない；一語たりとも、詩篇の一篇たりとも、書かれたものにせよ、目には見えないが守られてきたものにせよ、その儀式、慣習においてもそうである；何となれば、それらはみな聖なる本質であり、真理の保持は一刻たりとも途切れてはならないからだというものである。それらを神の霊を受け

(63) 1658年ニーコンは総主教の座を追われ、ヴォズニェセンスキー修道院に退かざるを得なくなる。1664年に、復帰できるよう試みたが失敗した。そして1666—67年の教会会議で最終的に処分され、流刑の身となった。彼は病気をいやした上で、一人で湖上の島に隠退所を建てたといわれる。1681年宮廷より部分的赦しを得てモスクワへ戻る途上死んだ。

(64) 彼は当時有名な フォードル・ルチャーシシェフ のおじにあたり、古代語を始め、種々の言語に通じ、ポーランドで学んだ修道士であった。著作活動においては、東方教父、西部ロシア、モスクワの神学書を引用する一方、意志強固で古き制度に深く根ざしていた。その立場を変えさせようとノヴゴロド府主教の座が与えられようとしたときも、“府主教になって新しい書のもとに行くくらいなら、喜んで絞首台のもとに行く”と言ったとされている。

(65) 全体の出版は未だない。一部は Бороздин により発行されている。

た教会の宝とみなし、それに変更を加えること、典礼書、儀式の改変、訂正は、闇の悪の力によって信仰の基盤を奪いとりとする試み以外の何ものでもないというのである。しかも彼は“修正”は真のキリスト教から離れてしまった西方で近年出版されたギリシャの典礼書、規則に依拠して行なわれたと判断していた。彼はこうした立場に立って、Символ Веры から《истинный》を削除したこと⁽⁶⁶⁾、三本の指による十字の切り方、典礼書の変更すべき論理を展開している。つまり教会指導者が修正という名のもとに、文法学、修辞学、哲学といった“学問”の故に、“キリストの使徒”⁽⁶⁷⁾よりも“教師”を尊んでいる、換言すれば信仰に対して世俗化した文化、学問を優先しているというのである⁽⁶⁸⁾。ここからキリストより世俗化された文化を尊重するという“背教”をふまえた終末論も登場してくる。背教が浮びあがってくるとき、“世の終り”とともに、“反キリストの到来”も浮びあがってくる。こうした考え方は先にみたスチュファン・ジザ

(66) Символ Веры の第2条では И во единого Господа Иисуса Христа... となっているが、古儀式派は Господа の前に 《истинного》 が古来あったとして、その削除に異議をとらえたのである。ちなみに Иисуса の綴りについても彼らは古来の Исуca を主張した。

(67) 正教会ではキリスト教史におけるいわゆる使徒時代の信仰生活の伝統を大切に受け継いできたことを自負さえしていたので、“使徒”のもつ意味は大きかったのである。ちなみに、17世紀には数多く書物が出版されたが《Апостол》なる書は何度も、何種類も出版されている。

(68) 17世紀中葉の政府には、動乱時代からのあらゆる意味での秩序回復が課題となっていた。そのために西洋文化の導入も必要なこととされ、それを可能とするためにドイツ人を招いたり、学問を奨励し、教育を普及しようとした。前者においてはプロテスタンティズムが関係していた。後者についてはギリシャ・ラテンの学問がとり入れられた。その際にまず考えられたのが語学、修辞学、哲学などであった。この分野で活躍したのが先にみたキーエフの学僧や、ギリシャ人修道士アルセーニイ、シメオン・ポーロツキイ、ルチーシシェフらであった。1681年モスクワにギリシャ語研究の学校が、86年にはスラヴ・ギリシャ・ラテンアカデミーが開設されている。こうした教育が進むとともに反発も生まれたわけである。アヴァクームはそうした気分を、「おお、哀れむべきルーシよ、何故に汝はラテンの慣習とドイツの生活様式を欲したのか？」という言葉によって表現している。

ーニィや 3. Копыстенский といった西部ロシアの神学者たちの考え方と同様であるが、反キリスト論についてももう少し詳しくみておきたい。彼は反キリストの到来を1666年と予定した。その算定法は次の通りである。

- (1)キリスト生誕後1000年にしてローマが教会から離反した。
- (2)さらに600年して、⁽⁶⁹⁾ プレストで合同を受け入れた西部ロシア教会が誘惑に陥った。
- (3)次の60年にニーコンは悪に充ちた新しい制度を導入した。
- (4)さらに6年後の1666年に闇の帝王自らが到来する。

この4段階説は必ずしも正確な歴史に基づいてはいない。(1)、(2)については基本的には《Кириллова Книга》に展開されているものと同じであるが、(2)で実際は595年であったのを600年とし、(3)でニーコンの改革をその60年後のものとし、(4)において漠然と6年という数字をもち出してくるところは根拠が十分でなく、むしろ666に合わせて逆算しているのであろうと思われる。事実、時期の正確なところについては確信があったわけではないといわれている。このように若干あいまいな部分もあるものの、これまでみてきた理論よりはそれなりに論理的であると言えよう。何故なら信仰が世俗化した“文化”に屈しているという主張⁽⁷⁰⁾は、信仰の本筋からすれば妥当な指摘で、近代の自由主義神学への批判にも通じるとと思われるからである。

一方、ネローノフの友人であったモスクワのズラトウスト修道院院長 Феоктист⁽⁷¹⁾ も1658—60年に著作活動を通じて反キリスト論に取り組ん

(69) 実際には595年で、つまり1595年となりウーニアの成立の年と符合する。

(70) ゼンコフスキーによれば、一連のこうした考え方はマクシム・グレークに由来するという。

(71) 17世紀中盤の教会刷新運動、боголюбцы の活動が盛んであった頃、モスクワのトヴェーリ修道院の掌院を務めていた。彼もこうした改革運動を支持し、彼らの主張するところであった единогласие と説教を導入し、友人ネローノフを熱烈に支持した。古儀式派ともつながりがあったようで、1670年代に入ってから新しい粛清の犠牲者となった黙示的説教家アヴラアーミィは逮捕されたとき、ネローノフ、アヴァクーム、フェオードルらの書簡とともにこのフェオクチストの著作ももっていたといわれる。

でいる。彼の場合は、黙示録解釈法分類で通常精神主義、理想主義、あるいは靈解主義⁽⁷²⁾と呼んでいるものに近い。反キリストの到来という問題を霊的にのみ考えており、特定の個人として出現するものではないとする。教会の敵の到来は、悪の勢力の増大（彼によればロシア人の心、とりわけ僧侶たちの中に活動し始めていた）に現われているとの考え方であった。この考え方は反キリストを чувственный антихрист として具体的人物を探す動きに対するもう一方の考え方で、духовный антихрист とみるわけである。つまり、ここに反キリスト論の一方の潮流がみられるわけである。

次に、いわゆるユロージヴィにして文筆活動をも行なった Афанасий⁽⁷³⁾（後に修道士となってからは Авраамий と名のった）の反キリスト論についてみてみたい。彼は、他の古儀式派教師より長くモスクワに留まって首都における《旧信仰》の重要な宣伝者の役割を果たした。

1666—67年頃から1670年のあいだに次の著作を世にあらわした。それは

(72) オリゲネスなどアレキサンドリア学派の寓意的解釈に始まる霊的・精神的解釈主義である。ティコニウスからアウグスティヌスなど中世初期カトリックの学者に受け継がれていった。

(73) アヴァクームの霊の子で、彼に最も近い弟子。アヴァクーム及びその同僚たちがプスタジョールスクへ流刑になったあと、モスクワでラスコーリニキを指導した。ほとんど独学で学問を身につけ、修道士アヴラアーミィとなる前にロシア各地の修道院を訪ね、それぞれの図書を利用したといわれる。温和でかつユーモアのセンスをもつ人とみられていたが、次のような黙示的予告を残している。——府主教パーヴェルから尋問を受けたときのこと、見よ、私の行なった推理はパーヴェルには最もお気に入りのものとなった。パーヴェルはその場にすわっておれなくなり、立ちあがるや私のもとに來たり、謙遜の故にか、愛想よく、私を祝福し始めた。そして私のあごひげをしっかりとつかんだ、というより引っぱった。そうしながら私のことで心を悩まし、私のひげが強いかどうか確かめた……ことの終りに私がその祝福によろめいて倒れ、床で傷つかないように私を支えた。パーヴェルは私のひげを確かめたあと、右手で私のほおに祝福を与え始めた。……彼は私の鼻にも祝福をした。このように、彼は1670年2月13日から14日にかけての夜逮捕されたあと、府主教パーヴェルを筆頭とする僧侶団の長期にわたる尋問、拷問の末、同年8月13日、断髪され、牢に投げ入れられたあと、71—72年の冬に焚刑に処されたのである。

《Христианоопасный Щит Веры》であり、資料としては主に《Кириллова Книга》から引用したものである。そこには、最後の背教は既に1666年だとされていたことを確認した上で、サタンはロシア教会の重大な過ちに対しニーコンという器を通し1666年にそれを滅ぼしてしまったこと、黙示録13章にみられるあの獣の数はこの年に一致していること、反キリストの王国は広まり、まもなく反キリスト自体が出現するということが物語られていた。しかも彼は反キリストは聖なるキリストの信仰を守っている最後の国ロシアに出現するに違いないと、第三ローマ論に立ったうえでの推論をもっていた。

別のツァーリ宛のアピール文においては、1666年⁽⁷⁴⁾を『ヨハネの黙示録』、イオアン・ズラトウストの書⁽⁷⁵⁾、エルサレムのキュリーロスの書、他の教父たちの書に示されているとおり、正教からの最後の離反の年と断定し、反キリストから自由であったキリスト教史の最後の年、最後のキリスト教国、第三のローマなるモスクワの最後の年とも言いきっている。従って、モスクワは第三のローマであったけれども、今や他の国々で勝利を収めた反キリストの攻撃の的となってしまったというのである。ゼンコフスキーによれば、彼において初めて、最後に残った唯一のキリスト教国、第三のローマなるモスクワ＝ロシアも遂に滅び、今やロシアを含めて全世界をみわたしても、“正教の王も、公も、聖人もいない”という主張がなされたという⁽⁷⁶⁾。しかもツァーリを明確に不真実な背教者としている⁽⁷⁷⁾。しかもツァーリを明確に不真実な背教者としている⁽⁷⁷⁾。こうした考え方に

(74) K. N. Brostrom によれば、この1666年にはアヴァクームの『自伝』にも登場してくる日食が6月22日(旧暦)にあったようで、人々に大きなショックを与えたという。

(75) イオアン・ズラトウストの著作は17世紀に多数出版されている。《Беседы на 14 посланий св. апостола Павла》(1623. 4. 2), 《Маргарит》(1641. 11. 1), 《О священстве》(1664. 8. 5), 《Беседы на евангелиста Матфея》(1664), 《Беседы на евангелиста Иоанна》(1665. 6. 9)である。

(76) С. Зеньковский 《Русское старообрядчество》, стр. 319

(77) 公然とツァーリのことを“不名誉な異端者にして、正教信仰の新たな背教者……そしてロシアの聖徒たちの新たな迫害者”と言って非難した。

立って終末の様相を次のように展開する。近く自然災害が起こり、社会的にもカタストロフがあるとして、次のように述べた。「神の怒りが汝の統治される国に降るのです。父は子に、子は父に武器を取り、同様に兄弟も互いにそうするのです。そして多くの町や村に神の怒りがみられ、多くの町や村が互いにそむき合って、荒れはてていきます。あちこちに地震が起こり、ひっきりなしに火が降ってきます……」⁽⁷⁸⁾ とツァーリ宛の訴状で訴えた。

さらにもう一人ユニークな古儀式擁護者がいた。それは輔祭 Феодор⁽⁷⁹⁾で, боголюбцы とともに、初期の反ニコン闘争とも直接のつながりをもたなかった人である。1659年に輔祭となってから教会内の対立を知り、古儀式派に傾いていった。1665年5月にはアヴァクームの釈放を求める請願書をツァーリの懺悔聴聞僧 Лукиан に出している。それにより1665年12月9日逮捕され、アヴァクームとともに囚われの身となった。しかし一時転向し、改革事業を認めるにいたった⁽⁸⁰⁾。その後再び古儀式主義に復帰したため逮捕され、1668年2月プスタジョールスクに送られ、アヴァクーム、Епифаний, Лазарь と合流した。ここで彼は《Ответ православных》を書いた⁽⁸¹⁾。そして他の3人とともに1682年殺された。

(78) 「マタイによる福音書」24章3—51節には、弟子たちの質問に答えてイエスが世の終りの前兆について語ったことばがある。7節で、民が民に、国が国に敵対して立ちあがること、あちこちに飢饉、地震があること、29節に日が暗くなり、月が光を失い、星が空から落ちてくることが語られる。同様の記述はマルコ13:5—27、ルカ21:8—28（16には両親、兄弟、親族、友人にさえ裏切られるとある）にみられる。

(79) 通常は Фёдор と綴られるが、伝統的な教会式の綴りによると Феодор となるのである。

(80) プロストロムは、この一時的転向は、飢え、疲労及び家族を思う気持からであったろうと推論している。その根拠として、彼はポクロフスキー修道院に送られた時、そこから逃亡して家に戻り、妻子を集めて逃げたことをあげている。

(81) この頃、一致していたもののアヴァクームとはよく論争をした。彼は独学であったが鋭敏で論理的な知的センスをもちあわせていたので、やや非論理的で熱情的であったアヴァクームとはタイプが全く異なっており、後にはアヴァクームと意見を

このフェオードルの反キリスト論は全体としてスピリドン・ポチョムキン或いは Капитоновщина の考え方に強く影響されており、ニーコンによる修正事業を誤り⁽⁸²⁾とし、ニーコンについては反キリストの下僕とみたうえで、⁽⁸³⁾ ロシア教会及び正教についてペシミズムをもっていた。そこからは非常にラジカルな悲観論的理論が生まれ、古儀式派に強い影響を与

異にするに至る。これをめぐるエピソードに、真偽のほどは別として、興味深いものがあるので以下に紹介しておきたい。フェオードルには、アヴァクームが古儀式派内の代表者をもって自任するその態度は、異常且つ野蛮的にして、詐欺師的であるように映った。フェオードルは自説をまとめたものを夜中にアヴァクームのもとに持っていったとき、アヴァクームは彼が獄舎を離れたことを守衛に通告した。その故にフェオードルは罰として、棒でひどく打たれ、裸のまま壁につながれ、2時間程極寒の中に放置された。フェオードルによれば、同僚たちはその光景を各々の獄から眺め、あざ笑ったという。このあと原稿がアヴァクームのもとに届けられ、アヴァクームはそれにいくつかの修正を加えたうえで、各地の古儀式派に送ったとされている。一方フェオードルはこうした修正に関して、自己の立場を弁護すべく、後日一つの“奇跡”について物語っている。それは、伝えられるところによれば、1677年に起ったことで、雪解け水が彼の獄舎に溢れた。アヴァクームが守衛に、溝を掘ってフェオードルのところにより多くの水が流れ込むように言ったため、状態はさらに悪化した。しかし祈ったところ、水は地中に“底なしの淵に入るかのように”消えていったというものである。アヴァクームがこのような罫を二度も仕掛けたかどうかは、自身がニーコンからそのような仕打ちを受けたとき、一方で非難しながらも、他方では赦すような態度を示していることを考慮すれば、大いに疑問の残るところであるが、このエピソードを通してフェオードルは、“洪水事件”に関してはアヴァクームの行為に勝利したことをあげて、自説の正しさを主張しようとしたことが明らかである。これによっても晩年フェオードルとアヴァクームとの間の溝は非常に深いものであったことが推しはかれる。

(82) スピリドン・ポチョムキンらにもみられるが、修正作業が古い羊皮紙のものによらず、西洋で出された新しいギリシャの書によって行なわれ、それによってロシアの古い устав を改変しようとするものであると考えたのである。

(83) ニーコンの名をあげつつサタンの所業の始まりを指摘して、「その時、神は見逃されたので、サタンはその所業をなすに至った。そして我が偉大なロシアの国を——ああ——サタンはその腕ニーコンによって、もぎとられてしまった」と言っている。

えた。⁽⁸⁴⁾ 主要著作は上記の《Ответ православных》で、古儀式を擁護するための論拠をまとめたものであった。そこで一貫して語られるテーマは、“最後の背教”の問題であった。それによると、まず西洋は信仰を世俗の学問に従属させるという反キリストの罠に陥り、滅んでしまったとし、キリストの再臨を前に残り僅かとなっているサタンの活動の時を分析する。サタンは、まだキリストに忠実である世界（彼によれば第三のローマである正教ルーシの国）をとらえようと一連の試みを始めたという。しかもそこには、黙示録の数字 666 をもつ1666年まではサタンの業はとどめられていたが、⁽⁸⁵⁾ 時いたって仕業が始められた⁽⁸⁶⁾ という考え方がある。つまり、本来は反キリストを暗示する黙示録の獣の数 666 をそのまま年代にあてはめるという、しばしば行なわれてきたが、本当はつながらないみ方なのである。従って、当然ニーコンの改革が最終的に確認された1666—67年会議に最後の背教・離反が生じたとみる図式ができあがる。しかし、なおその最後の離反は事実としながらも、反キリストについてはそれがどの人物の姿をとって現われたのか、今後現われるのかということを明確にしなかった。⁽⁸⁷⁾ それは最後の離反にひき続きすぐにでも起る筈の世の終りのカタス

(84) ユロージヴィ アファナーシイの黙示録観もフェオードルのものに近い。なおフェオードルには《Послание об антихристе》，半ば詩で半ば説教調の《О антихристовой прелести》といった著作もある。

(85) 彼によれば、ルーシはそれまでは悪の帝王の試みをことごとく打ちかえしてきたという。その例としてあげるのは、アレクサンドル・ネフスキー時代の十字軍の遠征、イヴァンⅢの時のユダヤ主義の罠、グリシュカ・オトレピィエフの時のローマ法王及びポーランドの陰謀などである。「我らの輝くロシア教会はその信仰により、そうした誘惑にもかかわらず、太陽よりも明るくみえた。平和と静けさは絶大なものであった」と言っている。

(86) 先に引用した言葉（注83）には、その前提として、ルーシの正教の勝利は1666年会議までであったと付言されている。

(87) 《Послание к сыну Максиму》（1678年頃）では、旧信仰に立つ人々への迫害について述べるとき、「反キリスト到来の兆しがある」と述べているにすぎず、反キリスト出現の時については語っていない。但し、初期の著作《Послание к иноку некому》，《Послание к Иоанну》（1669—70年頃）では、「1666年に反キリストによる苦難は来ている」と述べているという。

トローフ或いはキリストの再臨が現実化しなかったためであろうとゼンコフスキーはみている⁽⁸⁸⁾。

神学詩の形式をとった《О познании антихристовой прелести》には、反キリストの打ち勝ち難い力について述べながら、その近年にみられる所業を列挙している。法が破られ、イコン崇拝が認められ、キリストの肉と血のサクラメントが異端的になっている、殉教者の碑ができるとともに殉教者に対する信仰が支配的になっているというものである。また修正事業が始まってからの、特に1666年以降に叙聖された司祭は司祭でないとして、⁽⁸⁹⁾「これらの司祭や輔祭は宗規によって浄められておらず、反キリストの軍隊の一部……」とさえ言っている。この考え方は当然将来の無僧派にとっての論拠となった。にもかかわらず、彼は未来のことはそれ程考えていなかった。否、終末論と結びついたペシミズムに立つ以上、未来のことは考える必要がなかったからである。

このように輔祭フェオードルの主張は、カピトンにみられる禁欲的終末論に基づいた消極的・逃避的抵抗姿勢を残しながらも、後の無僧派への橋渡しの意義をもっていたように思われる。フェオードルはアヴァクームほど戦闘的ではなかったものの、結果的にはその主張がいわゆる古儀式派から、“古儀式に立つが故に分離させられたラスコーリニキ”への過渡的段階にあって意味をもつようになったとみることができるのではないかと思われる。

この項の最後にはやはり古儀式派最大の教師アヴァクームの反キリスト論をとりあげておかねばならないであろう。

アヴァクームは1666—67年の教会会議で裁かれ、67年8月26日ツァーリの命令により、ラーザリ、エピファーニイそして Никифор とともにブ

(88) С.Зеньковский 《Русское Старообрядчество》 стр. 346

(89) 例外としては、祈禱書等の修正事業が正式に決定された教会会議のあった1654年までに叙聖を受けた司祭で、かつ新制度についてはこれを受け入れなかったもの、或いは一度受け入れても後に改悛して古き信仰に戻ったものをあげている。

スタジョールスク⁽⁹⁰⁾に流刑となった。82年に処刑されるまでここで過ごし、著作活動をも行なった。⁽⁹¹⁾有名な『自伝』は72年から73年にかけて書かれたものであるが、その初めにはディオニシウス・アレオパギータ⁽⁹²⁾をも引用して終末論的な表現を残している。

さて、このプスタジョールスクからツァーリにあてて送られた最後の請願文で、アヴァクームはツァーリのことについてふれながら、まずこれまでみてきた反キリスト論からすれば風変りな、自己体験に立った反キリスト論を述べている。ツァーリ Алексей Михайлович には苦しい最期が待っていることを予告し⁽⁹³⁾、自分に関しては次のような幻が与えられた

(90) プスタジョールスク要塞は1499年にペチャラ川河口に設立された。1679年には90世帯、600人以上が住んでいたという。司令官の家、税関、監獄等があった。ツンドラ地帯に位置し、極寒の不毛の地であった。流刑囚にはかなり移動の自由があったようである。

(91) アヴァクームは45才頃(1666年頃)まではあまり著作活動はしていない(現在みつかっている著作の総数は90といわれるが、そのうち10が初期のもの)。大部分はプスタジョールスクでなされている。すなわち1667年12月12日以降1682年4月14日までの間である。多くの請願、書簡のほかに、《Книга бесед》(69—75), 《Книга толкований》(73—76), 《Книга обличений, или Евангелие вечное》(79), 《Житие》(72) などを残している。

(92) デイオニシウス・アレオパギータは聖書「使徒行伝」17:34に登場する人物アレオパゴスのデオニシオによって書かれたものとされたが、それとは別の人物3世紀の主教ディオニシウスが書いたものである。(偽ディオニシウス文書ともよばれる)。これは正教神秘神学の原典ともされる書である。否定神学(apophatological theology)について語られており、現代の秀れた正教神学者の1人 V. Lossky の《The Mystical Theology of the Eastern Church》に詳しく紹介されるとともに、それに依拠した神秘主義的な正教神学の解説がある。なお、哲学の分野では一般に新プラトン主義として扱われているが、ロスキーはそれを否定している。

(93) アヴァクームはツァーリに対しては、メゼーニへの2回目の流刑後に出されたツァーリ宛の第2、第3の請願文にもみられることであるが、ツァーリというものは現今の教会問題について指導的役割と責任を果たすべきであるとしながらも、やがて旧教徒の信仰に戻って事を処理してくれるであろうという幻想、期待をもっていたようである。1668年の請願文でもツァーリを《государь царь, державный свет》と呼んでいる。しかし最後の請願文ではツァーリと絶縁し、ツァーリを“正しい正教信仰”へ引き戻すことを断念した。但し、В. И. Малышев が見つけた皇妃イリ

というものである。つまり、ツァーリはこの世でただロシアの地だけを支配しているにすぎないが、自分には神の御子が天も地も服従させ給うたという内容である。また他の幻で反キリスト自身が自分に驚き、跪くのを見たということからすれば、アヴァクームは自分は霊的には全てのものにまさり、反キリストよりも強いと考えていた⁽⁹⁴⁾ ことが推測される。ゼンコフスキーによれば、この請願においてアヴァクームは最後の背教・世の終りにはキリストを信じる者が少なくなり、サタン、反キリストの軍勢が多くなるとして、ローマ教皇の権威をキリスト教にとっての恐るべき脅威、ローマをバビロンの淫蕩と反キリストの勢力⁽⁹⁵⁾ とするこれまでになかった見解を展開している。ここには、ニーコンの修正事業に対して猛烈に反対したアヴァクームが、修正事業の背後に見えかくれする“ローマ”なる概念を敵とする態度が表わされている。と同時にロシアに対する期待と責任を非常に強く感じていたことがよみとれる。

そのことは『自伝』にもみることができる。1666—67年の会議⁽⁹⁶⁾ でアヴァクームは居並ぶ総主教たちの前で次のように述べている。ローマは陥落し(しかも立ち上れなくなっている)、ポーランド人もローマとともに滅んで、キリスト教徒の敵となってしまった、そして正教は回教トルコの侵略により不純なものに堕してしまった、しかし自分たちは(そうした)あ

ーナ・ミハイロヴナ宛書簡ではなおツァーリを旧信仰へ戻らせる望みを抱いていたとゼンコフスキーは指摘している。

(94) 『自伝』にもみられるが、アヴァクームによれば彼には病気を医す力などが備わっていたという。

(95) スピリドン・ポチョムキン他にみてきた、あの世俗文化が信仰に優先されているという論理でローマ教会を非難している。その意味ではアヴァクームもマクシム・グレークの主張を継承しているわけで、世俗化された文化のことを、《外の》文化、すなわちキリスト教の外にたつ哲学とみていた。

(96) 1666年11月2日、アレキサンドリア総主教バイシオス、アンテオケ総主教マカリオスがモスクワに到着している。会議は12月1日に始まり、ニーコンを非難し、後任にヨアサーフを選んでから、シスマの問題に入り、1667年5月13日に古儀式に対し破門宣告を下した。

なたがた（総主教たち）に驚かない、あなたがたは衰えてしまっている、だから今後は自分たちのもとに学びに来る番だといったことである。さらに続けて、「背教者ニーコン以前のわがロシアにおいては、信心深い公やツァーリの正教信仰は純粹でしみのないものでありました。教会も平穩でありました。あの狼ニーコンが悪魔と与して、この3本の指で十字を切ることによって我々を裏切ったのです。ツァーリ イワンが統治しておられた頃にかかれた賢明なるモスクワ会議⁹⁷⁾は、昔の聖人教父やメレティウス他が教えた方法で指を組み、十字を切ったり、他の人々を祝福することを命じております……」と述べている。ここには第三のローマ論を意識した主張がみえる。つまり、第一のローマは既に滅んで久しく、第二のローマコンスタンティノーブル（ギリシャ）の正教も回教徒の前に落ち、今や正教、キリスト教を護っているのはロシア以外にはない、従ってそのようなロシアの正教を忠実に受け継いでいる自分たちを裁くのは誤りであると大胆に述べているのである。さらに『自伝』では、東方からの総主教たちについて、同志たちを次々に火刑に処していった責任を追求して、そのやり方も“タタールの神マホメット”のやり方に倣っているとして、鉄面皮の反キリストの小悪魔のようだと言っている。ここにもギリシャの正教は完全に否定されているのである。また非常に興味深いアヴァクーム自身が書いたスケッチが『自伝』第三改訂版に残されているので紹介しておきたい。それは真中に円があり、その円の中に5人、外に5人の人物が描かれているものである。K. N. Brostrom の解説によると、円内の5人は神に選ばれた者で、円外に立っているのは地獄に落ちる者たちで、総主教パイシオスとマカリオス、大主教イラリオン、総主教ニーコンと府主教バーヴェルである。アヴァクームは欄外に、パイシオスは“キリストを裏切った銀を愛するもの”，マカリオスは“へつらいの人”，ニーコンは“神から離れた呪われた総主教”と書いている。そしてマカリオスとニーコンのところ

97) これは1551年のストグラフ会議のことで、1666年会議までは権威あるものとされていた。また、引用されているくだりでアヴァクームはイワン雷帝のことを2度口にしているが、イワンのことを期待感をもって意識していたに違いない。

には《бабо-》という語がみられ、これは баба なる語で、それをもって
 アヴァクームは気ままな女性を表現（侮蔑的に）していたから、両者は
 баболюб であるとみていたらしい。

従って、そのような反キリストの勢力に動かされて改革を行なったニー
 コンや、それを承認した東方の総主教たちに対してはまた非常に厳しい態
 度をとる反面⁽⁹⁸⁾、ツァーリにはこれまでもみてきたように教会に対す
 る正しい指導力の行使を期待し続けた⁽⁹⁹⁾。アヴァクームが理想的 ツァー
 リ像をあのイヴァン4世にあてはめていたことは、《...миленький царь
 Иван Васильевич скоро бы указ зделал такой собаке》⁽¹⁰⁰⁾ と言っ
 て、イヴァンなら犬ニーコンの所業にも適切な裁定を下していただろうと
 の見解を示していることにも表わされている。

こうしてみると、アヴァクームの反キリスト論、終末論は断片的で
 あり、また政治的であった。そしてカピトン派やフェオードルらにみられ
 るペシミズムは一切みられない。この現象はある意味で妥当である。終末
 を恐るべき力としての反キリストと結びつけて過度に意識していくならば、
 消極的、悲観的態度が生まれてくるであろうが、アヴァクームにおいては
 悪の所業に敢然と闘いを挑みつつ、なおそれに勝利するという希望がある
 わけで、そこからは楽観論的立場が生まれてくる。そしてそうした立場に
 立つときには、反キリストの到来についての関心は比較的第二義的なもの

(98) アヴァクームはニーコンのことを、“まだらの犬”，“狼”などと呼んでいる。ル
 ターは反キリストとの関係でローマ教皇のことを“熊狼”，（ダニエル書11：36の）
 “怪物”としている（「皇帝に対する抵抗権についての討論」他）。

(99) 1670年以後アヴァクームのツァーリ観は、ツァーリに何の変化もみられないこと、
 迫害の第一波が始まったこともあって、変わったといわれるが、それはアレクセイ
 ・ミハイロヴィチに関することで、なお《ツァーリ》には期待をもっていたよう
 である。次のツァーリ フョードル・アレクセーイェヴィチには旧信仰に戻るよう訴
 えている。それは1682年に処刑される直前に出された請願文においても第3のロー
 マを純粋な正教へ回帰させるよう訴えているというから、確かであろう。

(100) 《Сочинения протопопа Аввакума, Памятники истории старообрядче-
 ства XVII века》кн. I, вып. I, Ленинград, 1927, Русская историческая
 библиотека, XXXIX, 458 にある。

となってくる。それは《反キリストの幻》⁽¹⁰¹⁾ についてもみられる。それによると、

あるとき祈っているうちに眠り込んでしまった。夢の中でか自分が美しい野にいるのを見た。そこには多くの人々が動きまわっていた。聞いてみると自分を反キリストが狙っているとのことであった。長司祭の長杖を手にして身構えていると、白い法衣を着た二人の人のようなものが、全身悪臭に満ち、醜く、火をはき⁽¹⁰²⁾、口や鼻の孔から、耳から悪臭に満ちた炎を出している裸の人間を連れてきた。これが反キリストらしく、そのあとにはツァーリ アレクセイ・ミハイロヴィチと政府の者たちの長い行列があった。その男が近づくや、自分は大声で叫び、長杖をもっ打とうとした。するとその男は、“長司祭のお前がわしに向ってどなり声をあげるのか？ わしは望まない者を我がものとはしない…”と言って自分の前にうち倒れて、地にひれ伏した。

となっている。この絵図は反キリストがアヴァクームのもとにひれ伏すというものであるが、アヴァクームによれば反キリストが自分の前にひれ伏したのは、自分が断乎とした態度で反キリストに従うことを拒否したからということになる。反キリストに打ち勝つ信仰があったということになる。敢えて私見をはさむなら、この態度は信仰者にふさわしいものであるといえよう⁽¹⁰³⁾。ゼンコフスキーは、アヴァクームは《послание к братии

(101) 《Книга бесед》中の8番目の беседа でふれられている。1672年頃のもの。

(102) 参照（対比）「黙示録」9：17, 18,

(103) 聖書で直接“反キリスト”という語が登場するヨハネの第1の手紙2章では、反キリストについての概念が述べられたあとの24節で、“はじめから聞いていたことが、あなたがたのうちに、とどまるようにしなさい”。28節で“子たちよ、キリストのうちにとどまっていなさい。それは、彼が現われる時に、確信を持ち、その来臨に際して、みまえに恥じることがないためである”とある。同じく4章2節には（伝えられてきた福音を聞くものと）“迷いの霊”との区別がおこるとある。また主の日について述べられているⅡテサロニケ2章にも正教会の伝統論の根拠となっている15節に“堅く立ってわたしたちの言葉や、手紙で教えられた言伝えを、しっかりと守り続けなさい”との言葉がある。他にも終りの時の備えに関する言葉は各所にみられるが、これらをどのように受けとめるかで態度も変わってくるのである。アヴァクームは世の終りの状況の中でも、これらの言葉に立って積極的に生きているのであり、それは聖書全体の流れからすれば正統的であると思われるのである。

на всем земном шаре》において自分たちも反キリストを恐れていると同時に、自身が反キリストであることもしばしばだといったことを述べているとして、その反キリスト論はあいまいなものであったというが、信仰をダイナミックにとらえて、信仰によって大胆に生きるなら、そうした反キリストに対する態度はむしろ妥当なものであるように思われるのである。黙示録にみられる獣の数666が誰を指すかという問題に重点をおくと、探すことに関心がうばわれ、探しあてたとしても議論が極めて単純化してしまい信仰のダイナミズムが失なわれるように思われる。聖書によれば、“常に”世の終りが切迫しているという状況の中で、堅く信仰に立ち、誘惑に陥らないことが勧められているから、アヴァクームの反キリスト論が到来の時期とか、誰を指しているかということについて直接触れていないからといって、あいまいであったとすることはできないであろう。但しそのようなことについて具体的に指摘した他の反キリスト論と比較して、必ずしも明確なものとなっていないというのなら理解し得る。

とまれアヴァクームは当時の古儀式派において、その反キリストに関する態度は独特のものであったとすることができよう。つまり、あくまでも自分の確信する古き伝統に立った信仰には、やがて反キリストの陰謀に勝利するという信念があったのである。それは『自伝』にも燃えるような信仰として生き生きと物語られているとおりである。ニーコンの改革に対してただ反対するだけでなく、闘っていく指導者の姿が反キリスト説についてもよくあらわれているとすることができるように思われる。

以上、“改革”が実施され、その結果が教会社会に適用されていく過程での古儀式派の反キリスト論についてみてきたが、まとめておきたい。

この時代の反キリスト論にはさまざまなものがあったが、いくつかのタイプに分類することができる。それはこの時代の宗教的運動の性格に関連している。一つは、終末論を強く意識した逃避的禁欲的な動きで、1666年を反キリスト到来の年として“自殺”の動きをみせた。次は боголюбцы の流れをくむネローノフらの反キリスト論で、ニーコンの教会改革を古き

伝統への裏切り、真のキリスト教からの離反（背教）とみるものであった。最後はニーコンの改革に敢然と闘いを挑むラスコーリニキの指導者たちであるが、ここには反キリスト論に関して必ずしも一致したものはない。第三ローマ論に立って背教を意識したもの、終末論的ペシミズムに立ったフェオードル、そしてあくまでも希望をもって闘い続けたアヴァクームと立場が異なったのである。

一方次元を変えてみると、反ローマ、反カトリックが反キリスト論とつながっているが、それと同時に生命を失ったギリシアに対する反発もあったことが指摘される。それは、当時ロシアに来て、修正事業にも加わった Арсений Грек を、一度異端視されたもの⁽¹⁰⁴⁾ が、新制度導入に加担しているとの理由で“反キリストの武器”とみなしたことにもあらわれている。

つづく

付記—ここでは筆者の設定した時代区分では第二期までをあつかった。第三期については次回とする。注には、人物、地名などについての解説的なものも加えてある。

(104) 1649年エルサレム総主教パイシオスとともにモスクワに来て、そのままとどまった。パイシオスはこれを不満として、アレクセイ・ミハイロヴィチに手紙を書き、アルセーニは正教徒として疑いがあるので要注意して欲しいと伝えたので、ソロフキーに送られた。しかし、ニーコンはモスクワに呼び戻し、チュドーフ修道院に置いて若者の教育にあたらせたほか、典礼書の修正事業にも参加させたのである。